

紹介

福岡考古学研究会編

『九州考古学の諸問題』

福岡県はわが国でも有数の考古学が活発なところである。それは、もともと資料の豊富なことにもよるが、わけても研究者たちの努力や研鑽に負うところが多い。

そのような人たちのあつまり、福岡考古学研究会はかつて会の討議成果を「九州考古学の諸問題」として『考古学研究』（一九一—一九七二年）紙上にもたらした。今回、その論文を含め、新たに七編の新しい論文が収録されて、『九州考古学の諸問題』が刊行された。以下、所収論文をみてみよう。

「九州考古学の諸問題」（西谷正・下条信行・木村幾多郎・島津義昭・佐田茂）は、九州の考古学的課題すべてにわたって論が及ぶものではない。議論は主として、縄文後・晩期の問題、弥生時代の分業問題・村

落構造・終末期の墳墓、および発生期古墳の問題・岩戸山古墳群と地域社会・群集墳などをめぐって展開されている。このうち、弥生時代の分業問題は本書の下条論文で、村落構造は高倉論文でさらにつつこんだ論がなされている。

縄文後・晩期の問題は賀川光夫氏の原始農耕論批判からなっている。賀川説の批判は、すでに乙益重隆・佐原真氏などによってもなされているが、本論による批判はとりわけ石器の機能を論じた点にその特色がある。また、後・晩期の集落立地から、〔黒色磨研石器〕は縄文中期原始農耕と同様にあくまで縄文文化の系譜上にあるもので、〔縄文晩期農耕〕として弥生時代の前時代的性格を示すものではない」との評価をくだしている。近年調査された京都府桑飼下遺跡の所見もこの論文の内容に呼応するかのように見える。

一方、古墳時代の章のみは『考古学研究』所収の前論致にいくぶん修正が加えられており、方形周溝をもつ小型古墳の評価、あるいは群集墳構成と村落構成の対応関係な

どにそのあとが著しい。

「九州地方におけるナイフ形石器について——ナイフ形石器の機能と規定について——」（二宮忠司）は、九州地方出土のナイフ形石器を初めて総括的に論じたものである。論末に図示された八三点のナイフ形石器の実測図（実大）は極めて有益である。

「九州地方における貝塚研究の諸問題——特に自然遺物（貝類）について——」（山崎純男）は、貝塚における貝類構成比を広範にわたって紹介し、分布や出土土器型式などから、九州地方における貝塚のあり方を論じている。氏は、貝類の捕獲よりみた場合、九州地方の貝塚の発展段階は四つに区分されるといふ。そのうち、第Ⅱの段階には西北九州と東九州とで漁撈活動にちがいがあり、第Ⅲの段階には四つの地域が分立し、うち二組の食糧生産における補充関係が認められるという。

「西日本の独鈷状石器」（島津義昭）は、中国・四国・九州地方に分布する〔独鈷状石器〕の型式と分布をとりあげたものである。その本来の意図は（九州にみられる東

日本の遺物の抽出とその変容の姿を探ることにより、九州縄文期の性格が評価できる) ではないかというところにある。氏はこの石器を四種に分類し、刃部が左右に強い彎曲をなすb-b'が九州地方に固有に分布する点を指摘している。また、西日本型独特の年代を縄文時代晩期から弥生時代前期に比定する。しかし、年代の根拠にあげた鹿児島県濁野例は、梅原末治報文(大隅発見の異形石器)『人類学雑誌』五九(一七)からの引用がいささか適確でないので不安が残る。

「未製石器よりみた弥生時代前期の生産体制」(下条信行)は、氏の今山石斧と立岩石庖丁を素材とする弥生時代の社会的分業研究の嚆矢をなす論文である。北九州沿岸の糸島・早良・福岡・粕屋・朝倉・小郡の小平野に所在する弥生時代前期の遺跡を検討し、そのほとんどから未製石器が出土する事実をあげて、石器の「各遺跡単位での自足的製作行為」を認める。しかも、その集落のなかでも《各単位》ごとに石器を製作しているらしいと説く。さらに「収穫

具・石斧・石製利器・その他」の石器がいかなる石材でどのような時期にあらわれるのかを成品、未成品にわたって検討している。そして「夜白・板付I期に一部の石剣や柳葉形の磨製石鏃を舶載に委ねながらも石庖丁・石斧等の基本的生産用具を中心に、その他紡錘車・勾玉などの石器を自足的に製作しはじめが、この生産態系は、板付II式から前期終末頃にかけても、同じ軌跡をもって進行し、新たに起った鉄剣形の石剣や二等刃磨製石鏃などもその範囲に加えて、固定的な生産関係として展開して行く」との結論をえている。また、前期の頁岩質砂岩を材料とする石庖丁をとりあげ、そこにみられる原材産出地↓各集落での入手↓各集落内製作という構造は、縄文時代の石器生産とも酷似するものであると指摘している。しかし、氏が例示したすりきり痕をもつ板状の石材が、九州地方の縄文文化の伝統をうけついだものかどうかは疑問であろう。

「弥生時代の集団組成」(高倉洋彰)は、いわゆる共同体論ともかかわるものである。

氏は、弥生時代の「農業生産力の拡大が」
「人間の土地に対する関係と労働編成の主体とを变化」させたとして、
〈家族集団〉
↓〈地域集団〉
↓〈地域的統一集団〉の段階を経て階級社会に移行したことを叙述している。論の大半は集落遺跡の分析にあてられており、氏の一連の作業と関連して注目をひくものである(「弥生時代祭祀の一形態」『古代文化』二五・一「墳墓からみた弥生時代社会の発見過程」『考古学研究』二〇・二〇)。

「北部九州における初期横穴式石室の展開——平面図形と尺度について——」(柳沢一男)は、副題どおり、福岡県を中心とする六世紀中葉以前に編年される横穴式石室を対象に、推定尺度の方眼をもちいて、その平面図形と尺度の関連を検討したものであり、その結果として、約二四センチメートルを一尺とする実用尺の存在を推定し、その系譜を中国の晋尺に求めている。高麗尺に先行する尺に対するこのような見解は、すでに森浩一氏(『古墳の発掘』一九六五年)によって提唱されているが、本論放は

横穴式石室の型式学的検討を踏まえ、豊富な実証例をもとに帰納されたものとして、すぐれて説得力をもっている。また、氏は尺度論を展開する一方で、その前提となった各横穴式石室の形態分析を發展させているが、それがこの論致のもう一つの柱となっている。対象とされた石室は「横田下タイプ石室」・「堅穴系横穴式石室」および「両袖型石室」であるが、分析の中心は、特に「堅穴系横穴式石室」に向けられ、横口部の構造より大きくは三類に分類されている。Ⅰ類は棚状構造をとるものであり、Ⅱ・Ⅲ類は横口部に袖石のないものと有るものとであるが、Ⅰ・Ⅱ類↓Ⅲ類↓「両袖型石室」と展開し、これが北部九州の初期横穴式石室の主流をなすという。そして、発生期には南朝鮮の高霊伽耶地方との関連が密接であり、Ⅲ類の成立には「横田下タイプ石室」の影響が推定されるとする。また、「両袖型石室」の成立には畿内および肥後地方の石室形態が強く影響を与えており、この型式の石室は「屯倉設置を含めた畿内勢力の浸透と、火君勢力の拡大という

政治的動向のなかで成立した」と推測する。

「九州の祭祀遺跡」（佐田茂）は、狭義の祭祀遺跡・住居址にともなう祭祀・子持勾玉と順を追って遺跡・遺物の紹介を行なうながら、その中に問題点を探り出しているが、特に後二者に主眼がおかれている。集落での祭祀を生産に係る単位との関連で

追求すること、および子持勾玉の祭祀のあり方に大和政権の支配構造ならびに地方豪族との関係をさぐるという明確な目的意識につらぬかれた基礎的作業ということができよう。ただ、子持勾玉の二種について、

古墳時代の通例とは異なる、扁平な、側面に子を持たない例を歴史時代のものとしているが、福岡県鞍手郡火の尾一号墳出土の二例が伴出の須恵器などより六世紀後半頃とされている点（小田富士雄「九州」『神道考古学講座』第二巻 一九七二年）が気にかかる。

激しい開発の波の中で文化財行政に携わっている人たちの苦勞は並大抵のことではない。しかも、そうしたなかで研究会を維持し、新しい問題意識に燃えるすぐれた研

究をものして行く姿勢（本書「考古学研究会の歩み」参照）には頭の下る思いがする。

最後に、本書の最大の意義の一つをこの点に求めて筆を置くことにしよう。ただ、そういう意味からいえば、本書はより安価なものであってはしかなかったと思う。

（A5判 三五九頁 一九七五年三月 東出版株式会社 五、八〇〇円）

（中村友博・和田晴吾）